

US パテント文章「解体新書」  
—英語 OS インストールマニュアル付録

バトルオンザイングリッシュ

はじめに

「バトルオブブリテン(The Battle of Britain 大英帝国の戦い)」とは、歴史好きの人ならご存知の、イギリス本土侵攻をたくらむドイツ軍の先陣を担ったドイツ空軍と、それを阻止せんとするイギリス空軍の、イングランドの空を舞台にした戦いである。時は、ナチスドイツのポーランド電撃作戦で始まった第二次世界大戦が10ヶ月経過した1940年7月のことである、圧倒的多数を誇るドイツ空軍の前に立ちはだかった寡勢のイギリス戦闘機隊の勇戦奮闘は、およそ2ヵ月半後、ヒトラーをしてイギリス侵攻をあきらめさせたものとして、チャーチル首相が、「かくも少数の人々(戦闘機隊パイロット)に、かくも多くの人々(イギリス国民)がその恩恵を受けたことは歴史上かつてない」と賞賛したことでもうかがい知ることができる。

この空のドラマは、多くの人を惹きつけ、もう30年以上前になると思うが映画にもなった。この映画での空中戦撮影は、英国に保存されていた「スピットファイア」と「ハリケーン」戦闘機を現役のイギリス空軍パイロットが操縦し、ドイツのハインケル爆撃機とメッサーシュミット戦闘機は現物を(まだ!)保有していたスペイン空軍のパイロットの協力を得て行われたという。「ヒコーキ大好きオジサン」の僕なんぞは、覚えている限りでも3回も映画館に通ったものだ。

前置きが長くなった。これから語るのは、この華麗なる「バトルオブブリテン」の物語ではなく、僕自身の、そして少しだけ仲間たちの、いささかも華麗さの無い、英語との格闘の物語である。

題して、「バトルオンザイングリッシュ Battle on the English」。

12歳、中学1年生の春、望んだわけでもないのに義務教育として、強制的に英語の勉強を始めさせられて以来半世紀、いまだにこの「英語」というものと格闘している、汗と涙とドタバタの物語である。

(2004年5月 篠原泰正)

## (1) コーナーズジェントルマン、プリーズ —あるいはイギリス式発音について—

高等学校の3年生の時、英語の時間のひとつとして、週に1回、英国のケンブリッジ大学だったかオックスフォード大学だったか忘れてしまったが、その大学を出た若いイギリス人先生の時間があった。あるいは大学院学生か研究員で、交換留学生として大学に来ていたのかも知れない。

英語には自信も情熱も無かった僕としては、その一時間を無難に過ごすことを基本的な対応策としていたのだが、不幸なことにどういうわけか、この若い先生(学生?)に眼を付けられ、毎週、「コーナーズジェントルマン、プリーズ」と指されてしまうのだ。意味するところは、教室の一番後ろ左の隅に座っていた僕のことである。そこで、仕方なく、テキストを声を上げて読まされたりするわけだ。「corner」という言葉は、日本語化しているぐらい当り前の名詞であるが、これが動詞として使われると、「隅っこに追い詰める」という意味があるから、まさに僕としては絶対絶命、隅に座ったまま脱出もままならず追い詰められてしまっていたわけだ。

しかも、僕の学んでいた高等学校は、当時、進級の厳しいことでも有名で、毎年全学で一割強の落第生を出していた。従って、三年生ともなると、一年生の時に落第した者、二年のときにずっこけた者、そして大学に進級できなくて三年生で滞留している者など、僕のクラスの半分は4年生で、中には5年生という強者(つわもの)もいると言う有様で、僕のようにまともに三年まで上がってきたようなものは教室で小さくならざるをえなかつた。更に、困難な仕事は下っ端に押し付けられるという社会の法則どおりに、彼ら先輩達が苦手としているこのような英語の時間などは、彼らに被害が及ばないよう、つまり指名されてテキストを読まされたり質問に答えたりすることがないように、身を挺してそのような「困難な仕事」を引き受けざるをえない状況下に置かれていたわけだ。

ともあれ、その下っ端として、僕は指名に応じてテキストを読む。

先生が訂正する。そこは「オフン」ではなく「オフトン」と発音する。なるほど、「often」は「オフン」ではなく「お布団」と発音するわけだと、僕は覚えこむ。変な覚え方をしたお蔭で、「often」という単語に出会うと、いまだに「布団」のイメージが頭の中に浮かぶ。

後になって気がついたことだが、この先生の発音は「キングスイングリッシュ」と呼ばれる英國上流階級の人々の発音であった。そのときから20年以上経つて、鉄の女と称されたマーガレット・サッチャー首相の演説をテレビで聞いていて、“オ—懐かしい発音に出会ったな”との教室のことを思い出した。どのような発音かは、例えば、エリザベス女王の「お言葉」を聴

いていただければよい。

思い出したので、話が飛ぶが、どこの国においても、上流の階級の人はゆっくりしゃべる。どうやら早口でまくし立てるのは、下層の民の言葉らしい。天皇陛下が早口で「新年のお言葉」を述べられる図など、想像できないでしょう。そのことに気がついてから、僕も「英語はゆっくりしゃべることにしている」と人にはのたもうている。内実は、早くしゃべるだけの処理能力がないだけのことなのだが。

更に話はそれるが、米国大統領ミスター・ブッシュ（ジュニア）の話は、語彙は極めて乏しいので単語の意味を理解するのには困らないが、なんだかテキサスのアンちゃん風のしゃべり方であるし、よく聞き取れなかつたのでテキストになった（アメリカの新聞、たとえばワシントンポストは記事の他に、このような演説なり記者会見の質疑なり、丸ごとテキスト化して、ウェブで提供してくれている）文章を読むと、やはり俗語風の言い回しが多く、読んでも何を言っているのか分からぬ箇所にしばしば出会うことになる。多分、ブッシュさんは外国語は一つも履修しておらず、言葉で苦労していないから、自分のしゃべる英語は世界中の人に理解してもらえると考えているのではないだろうか。

僕の子供の時、祖母が孫達の顔を見るために、清水の舞台から飛び降りるぐらいの一代決心をして、生まれて初めて神戸から東京にやってきたことがある。そのときの感想が、ここの人たちは何で変な日本語をしゃべっているのだろうというものであった。おばあちゃんは日本中誰もが神戸の言葉でしゃべっていると思い込んでいたのだろう。（＊当時テレビはまだなかったので、他地域の言葉に接する機会は、特に女性子供にはめったになかった）  
ブッシュさんも、多分僕のおばあちゃんと同じではないだろうか。何しろテキサスは一州で充分に一国ぐらいの広さがあるから、テキサスの流儀が世界中に通用すると思い込んでいるとしても、さほど不思議ではない。

話を元に戻す。

ともかく、教室の先輩達（4年生）に厄災が降り注がないように、一手引き受けとまでは行かないながらも、先生の矢面に立って、オックスフォードかケンブリッジの発音に取り組み、その代償として、英語の発音への恐怖感を植えつけられることになった。ポリネシアの流れを引いて、母音が発音の核をなしている日本人が、子音が重要なポイントを握っている英語の発音を、そもそもできるはずがないのだ。若い先生も、一絶対に言語学の専攻ではなかつた一、多分英語を外国人に教えるなんてことは初めてであつただろうから、なぜ僕達が、こんなに簡単な英語の発音がどうしてできないのか不思議だったのではないか。

今から思えば滑稽な話だが、当時の中学や高校での英語の学習は、イギリス人あるいはアメリカ人と同じように発音できることが、当然のこととして学課項目にあつたといえる。中学でも英語の先生（日本人）からそのように指導された覚えがあるから、このことは証言できる。とんでもない学習方針があつたものだと、50年を経た今でも、うらみは消えない。

発音ができるだけ真似をするという教育方針の裏側には、欧米への憧れ、欧米への劣等感があったのだろう。今述べている舞台は、敗戦後まだ10年から15年という時期であり、アメリカ軍に完膚なきまでにやっつけられた記憶が誰にもまだ生々しく残っていた時だから、まあそのような憧れや劣等感が文部省や学校にあつたのは仕方がないこととしよう。

しかし、いまだに英米式発音（最近は英国のステータスが落ちて米国式一辺倒だそうだが）が学校で強制されているとなると、これは笑ってはいられない。これは一体どうしたことなのだろうか。世界中で、フランス人はフランス語風の、中国人は中国語風の発音で英語をしゃべっていて、それが当たり前となっている事実を、文科省や英語の教師は知らないのだろうか。テレビをひねれば、様々な発音の英語を聞くチャンスがあるので、まさかそのようなことはないだろう。それでは、いまだに欧米への憧れや劣等感があるのだろうか。そうだとしたら、その人は時代遅れの化石のような人ということになるが、これもまさか、という感じだ。それとも、述べてきたように僕もその犠牲者の一人であるが、生徒に英語への恐怖感を植え付ける手っ取り早い手段として、発音をあげつらっているのだろうか。不思議なことがあるものだ。

僕自身は、幸いなことに早い時期に、英語の発音への恐怖感を取り去ることができた。それは学生生活の最終ステージで、ヨーロッパへ遊学したお蔭で、何だ、フランス人もドイツ人もそれぞれお国なりで英語をしゃべっているではないかと気がついたときに、スッと気が楽になったのだ。一面からいえば、そのときまで、それほどに発音の呪文に心を縛られていたとも言える。このあたりの話は、また次回以降にゆっくりするつもりだ。

（第1回終り）

（2004年5月 篠原泰正）

## (2) グラマーとグラマー

### —あるいは文法とマリリン・モンロー—

グラマーということで、僕達の世代を虜にしたのは、フランスでは BB(ベベ)ことブリジット・バルドー、アメリカでは MM ことマリリン・モンローが双璧である。僕の頭の中では、「グラマー」という言葉に出会うと自動的にマリリン・モンローのあでやかな姿が浮かぶという回路になつているので、「イングリッシュ・グラマー」と聞けば即座にモンローさんの艶姿が出てきてしまうのだが、これは大きな「グラマー」違いで、当然モンローさんを評してのグラマーは「glamour」であり、イングリッシュ・グラマーは「English grammar」、あの恐怖の「文法」というやつのことである。

研究社の英和大辞典を引くと、「glamour」には：魔力、魅力、（特に性的な）容姿上の魅力、魔法、魔術、……とあり、まことにあのマリリン・モンローにふさわしい名称と言える。これに比べるともう一方の「グラマー」は、味も素っ気もない、魅力に乏しい「grammar」である。

なぜ頭の中で「グラマー」とモンローさんがつながってしまったかと言えば、これは、中学生のときに、モンローさんが「グラマー女優」（なんという懐かしい名称）の代名詞であったためである。モンローの「グラマー」が英単語では「glamour」と綴る、文法の意味では「grammar」と綴ると知ったのはそれから随分後で、その時には既に遅し、頭の中ではカタカナの「グラマー」、「グラマーといえばモンローさん」と定着してしまっていたわけだ。

ご承知のように、また英語他ヨーロッパ言語で苦労された方は身にしみて知っているように、僕ら日本人は「L」と「R」の発音の区別ができない。従って、カタカナで表記すれば、「glamour」も「grammar」も同じ「グラマー」になってしまふ。日本語にはこのグラマー（魔法、魔術）の如きカタカナがあるために、外国の言葉は何であれこれで表記できる。これによつて外国の事物、概念、何であれ言葉として取り入れができるという、例えば漢字だけの中国語と比べると圧倒的な利点がえられている。同時にこれは諸刃の剣で、僕の頭の中でモンローさんのグラマーと文法のグラマーの区別がつかなくなつているように、一度カタカナで外国の言葉を取り込んでしまうと、なかなかそこから抜け出せないというマイナス作用が生じることになる。

例えば、驚くべきことに、（自分で驚いていても仕方がないのだが）無知を晒す恥を忍んで言えば、東は中国から西はスペインまでつながる大陸、すなわち「ユーラシア」大陸の名称が、実は「Eurasia」（ユーロエイシア；ヨーロッパアジア）のことであったと知ったのは、割合最近

のことなのだ。それまでは、ともかくこの大陸のことは「ユーラシア」と言うとだけ覚えていたわけだ。（＊そもそも知らなければ中学の受験にも受からないだろう）

このように、一度カタカナで覚えてしまうと、当然その言葉は頭の中のメインプロセサーである日本語処理に組み込まれているわけだから、その強い影響力から抜け出すのは大変、あるいはオリジナルの英単語と関連付けるのが二重手間となる。「L」と「R」の発音の区分けができるないという問題は、実は問題でもなんでもなく、つまりできないものはできないと、尻をまくってしまえばそれで済む話だが、この、日本語としてのカタカナとオリジナルの英（単）語（英語だけに限った事ではないが）という問題は大きい。一言で言えば、英語を扱うときには「カタカナ」を一切排除しなければならないということになる。「English grammar」と聞いたときに、間違つてもモンローさんの艶姿が出てこないようにしなければならない。

カタカナ言葉のあまりもの氾濫に、できるだけ日本語で置き換えようという運動が、国語審議会かなんだか忘れたが、国の委員会であると聞く。しかし、これも変な話で、日本語に置き換えようという言葉のほとんどは、昔、中国から輸入した言葉であるか、あるいは黒船以来、知的指導層が漢字を使って嘗々として造語してきた言葉であり、いずれにせよ、オリジナルの大和（ヤマト）言葉ではない。カタカナで外国の言葉を表記した途端に、それはもう日本語の一員として処理上は組み込まれているわけだから、カタカナで書こうが、漢字を当てはめて書こうが、いずれにせよ輸入した言葉を扱っていることに変わりは無い。しいて言えば、表意文字である漢字で表わせば、おおよそその言葉の意味が汲み取れるので、万人向き、特にお年寄りには親切なことになるぐらいだろう。そこに本質的な差はないと言える。

となると、問題はやはり、英語を扱うときに既にインプットされているカタカナ言葉が邪魔になるというところに絞られる。「イングリッシュグラマー」がモンローさんを連想させないようにするにはどうすればよいのか。単純なようだが、英語を耳にしたときは、元の英単語の綴りが頭の中に浮かんでくるようにするしかなさそうである。つまり、僕の言うところの、頭の中の英語 OS を作動させて、その稼動中はカタカナ言葉を締め出すしか手はないのではなかろうか。そのためには、生の英語にできるだけ多く接するという単純な作業の積み上げしかないのだろう。

とはいって、英語を始める中学一年までの間に既に何千というカタカナ言葉は子供の頭の中に既に納まってしまっているだろうし、その後もドンドン入ってくるとなるとこれは難しい課題ではある。何しろ、日本語処理が稼動している時間と英語処理が稼動している時間を比べれば、英語が大好きな子供でも、あるいは仕事で英語を使わざるをえない人でも、一日の中で英語時間は1%にも満たないのと思われる所以、頭の中は圧倒的に日本語独占状態にな

っているわけだから。

(第2回終り)

(2004年5月 篠原泰正)

(

(

### (3) スエーデンの連れショーン

#### —あるいはグローバル化の道遠し—

「関東の連れショーン」という言葉をご存知だろうか。

小田原の後北条攻略戦もほぼ終わりに近づいた頃、秀吉が参陣していた家康を誘って小高い丘に登り、共に並んでオシッコしながら、遙かに広がる関東平野を指差しながら、これからはあなたがここを領有しなさいと指示したという話だ。以来、並んでオシッコするのを「関東の連れショーン」と言う。

スエーデンの世界的にも有名な大企業、自動車のボルボだったか、電気通信のエリクソンだったか、あるいはそれ以外の会社であったか名前は忘れてしまったが、その CEO が「今やまさにグローバルの時代である。よって、わが社もこれからの経営会議はすべて英語で行う」とある日宣言したのだそうだ。欧州の会社で重役の中にその会社の本籍地の母語（フランスの会社ならフランス語）を解さない外国人がいれば、会議は英語でなされると聞いていたが、このスエーデンの会社では本社重役は全員スエーデン人であったというから、これはかなり異例の通達であろう。

ともあれ、CEO のご指示であるから、全員おとなしく、以降の会議はすべて英語で行われるようになったらしい。幸い、スエーデン語はゲルマン語系に属していることだから、重役さんにとって英語で会議をすることはそれほど重荷ではなかったのだろう。CEO も成果に満足していたのだが、ある日の白熱した会議の中休みにトイレに入った。そこには二人の先客がいて、CEO が入ってきたことにも気がつかず、並んでオシッコしながら、大きな声で、しかもスエーデン語で、今の会議の続きを論じていたのだそうだ。二人の話を耳にして、CEO は嘆いた。「ああ、わが社のグローバル化の道遠し」と。オシッコしながらでも英語でやりあうようにならなければ、まだグローバルカンパニーとは言えないというわけだ。

これは、6, 7年前、友人から聞いた話の受け売りだから、信憑性は保証できないが、ありそうな話ではある。CEO の意図は、社内のコミュニケーションをよくすることにあったのだろう。外国企業と英語でやりあうことに何の問題もなかつたはずだ。スエーデンの人にとって英語は親戚の言葉なのだから、対外的なビジネス交渉で障害はなかつたはずだ。一方、社内を見れば、国際企業であるから当然外国に多くの支店、工場があるわけで、社員の国籍も様々である。重役さんたちが英語で会議をしていれば、必要な議事録はその英語のまま全世界の全社に通達もできるし、どこの支店や工場に行っても、その幹部とスムーズに英語でやり取りができるということになる。

これももう7、8年前のことになるが、当時日本でもEメールの活用が大きな話題になり始めたときで、日本のある大企業の社長さんの談話として、「私も社員にガンガンEメールで指示や方針を説明していますよ。便利ですなEメールは」という記事を読んだことがある。そのとき、「ハテネ」と思ったのは、この社長さんのEメールは英語なのか日本語なのかということで、記事の雰囲気から察すればこのEメールは日本語らしい。それでは、この企業の、世界に散らばる多くの現地法人の社員はどうなるのだ、という疑問だ。下手すりや、現地雇用の社員から、社長は意図して日本人社員にだけ重要な通達を流し、日本語が分からぬ自分達は情報を遮断されると、一種の差別(discrimination)として訴えかねられない。それとも、社長の傍らで、秘書がそのメールをせつせと英語に翻訳して、外国人社員向けに流しているのだろうか。

英語の会議、英語でのEメール、何でもかんも英語、英語の苦しみは、ほんのつい最近までは、好んで外国資本の会社に飛び込んだものだけが味わった苦労だったが、今や、日本資本の会社にいるからといって安閑としていられなくなった。日産自動車のCEOは外国人の人だから、想像するに、社長を交えての経営会議はすべて英語で行われているだろう。東京の銀座にいながら、えらいことになっているのではなかろうか。（＊えらいことは関西弁で、大変なこと、の意）もちろん、スエーデンの会社と違って、オシッコしている時ぐらいは日本語で大丈夫だろう。ゴーンさん（もう辞められたか）もそこまではチェックしなかったと思うが。

僕の経験では、ということは僕のレベルでの英語ではということだが、英語での会議においては、聞かなければならぬ話の半分以上は頭の中を通過してどこかに跡形もなく消えてしまうし、言いたいことは十分の一ぐらいしか言えない。（もちろん英語力だけでなく、控えめな性格がこの場合禍いしているのだが）。

英語はお任せくださいという人を別にすれば、僕ら日本人のほとんどにとって、グローバル化は精神的苦痛をともなう「エライコッチャ」なのだ。スエーデンの重役さんとは桁違いに、大変さの度合が大きいのだ。まさか、もう一度鎖国するわけにもいかないだろうから、避けて通れない道として、世界の変化についていくしかないが、自ら進んで大きな声で「グローバル化万歳！」と唱えるものではあるまい。自分で自分の首は絞めないようにした方が良い。しかし、視点を変えてみれば、英語さえそこそものにしておけば、（このそこそこ、という程度が曲者ではあるが）仕事の場で活躍するチャンスは限りなく広がってきているわけだから、悪い話でもない。さあ、どうしますか？

（第3回終り）

（2004年5月 篠原泰正）

## (4) 和蘭陀

### —あるいは通商命—

オランダの人は国民全部が英語を話せるのではないかと思い、オランダの人に聞いてみた。全員は無理だろけれど、それでも90%以上は話せるだろうね、ということだった。僕が勤めていた企業の欧州本社がオランダにあったので、ある出張の折に、そこに長年駐在している友人に聞いてみた。オランダ語とはどんな言葉かと。答えは英語とドイツ語の中間ぐらいなのということであった。僕も高等学校の時にドイツ語は少しかじったので、その答えでだいたいの見当はついた。彼は英語はもとよりフランス語にもオランダ語にも堪能であったので、この答えは鵜呑みにしていいだろう。ロマンス語の仲間で言えば、フランス語とスペイン語の中間ぐらいのカタロニア語(スペインのカタロニア地方の言葉)のようなものだと思えばよいのだろう。

オランダはご承知のように、国も海を干拓して作ったぐらいだから、天然資源なんぞがあるわけもなく、オランダ人のグローブのような大きい手を見れば、どう見ても器用とは思えず、これでは「モノ作り立国」は無理だろなどと判定できる。(幕末、徳川幕府が保有し、その後榎本軍の旗艦となった最新鋭軍艦開陽丸は、オランダに発注して作ってもらった船だから、モノ作りもたいしたものだと敬意を表すべきところだろう)。また、「オランダに美人無し」といわれているぐらいだから、美女をねたに稼ぐ策も取れない。(オランダ人の美女に出会ったこともあるから、この説は根拠のない風評であろう)。残された道は、世界を相手の通商、モノを右から左に流して、その間の口銭を稼ぐということになる。船操る能力だけでは通商は無理で、しゃべらなければならない。通商のやり取りは、七つの海を支配した英國のお蔭(?)で昔から英語だから、オランダ人は英語ができる。できないと食つていけないということになる。幸い、ドイツ語と英語の中間ぐらいの言語が母語であるから、英語をマスターするのは、昼寝をしながらでもできるのだろう。

通商で食うしかないとなれば、世界中と仲良くしていかなければならぬ。徳川の鎖国時代、長崎の出島というかすかな窓を通してのみ、日本は西欧の風を感じることができた。スペインのように、十字架を先頭に立てて大きな顔をするので、秀吉や家康を怒らせてしまったような外交上の不手際はオランダは取らなかつた。キリストのキの字も言わず、貿易のことだけに話を絞っていたので、出島というルートを確保し続けられた。このかすかな窓を通して、特に幕末には当時の世界のことを知り、明治時代を迎える準備ができたのだから、日本はオランダには随分世話をなつたと感謝しなければならないだろう。

世界と仲良くという、食っていくための基本方針とオランダ人本来の親切心のお蔭で、外国人にとってオランダは居心地のよい土地である。世界の航空会社の中で僕はオランダ航空(KLM)が一番好きだった。理由は簡単で、障害者、弱者への配慮が自然な形で行き届いているからである。ここのナショナル空港スキポールで搭乗待ちをしていたあるときも、突然マイクで「ミスター・シノハラ」と呼ばれてびっくりしたことがある。なんだろうと思って待合の席から立つと、なんとファーストクラスの人を呼ぶ前に、足の不自由な僕と幼児を連れていた若いお母さんの二人が真っ先に機内に案内されたと言うわけだ。カウンターでチェックインするときに僕の足が不自由であることを係り員がさりげなくマークしてくれていたのだろう。

航空会社だけでなく、ここのスキポール空港に、もう30年近く前の話だが、初めて降り立ったときも感激した。どこにも階段というものがなく、例えば車椅子でも、それこそ空港中すべてどこにでも楽々と行ける設計になっているのだ。この空港は戦前からある有名な老舗だから、途中改築したにせよ、昔からそのような設計思想があったのだろう。それに比べて、成田空港がオープンしたときには、今度は仰天した。そこら中階段で、エスカレータもなければエレベーターも無い。車椅子の人なら、ヒコーキに乗る前に、ヒコーキから降りてから、それこそヒマラヤ登山ぐらいの苦労をしなければならなかつたろう。方や戦前からの空港、方や1977年か78年に新規開店した空港でこの違いは一体どこから來るのだろうと、當時本当に絶望的なぐらいの思いがした。

話が英語から逸れてしまった。

今、日本でオランダ語ができる人はどれくらいいるのだろうか。もしかしたら幕末の頃よりその人口は少ないのではないか。彼らが英語OKだから、別に現在のビジネス上なんら差しつかえないのだが、幕末には伝統的な長崎通辞(オランダ語と中国語)があり、それだけでなく、蘭学ということで多くの若者がオランダ語を通して、医学のみならず近代科学全般及び技術を学んだ。勉強に熱心な秀才とは見えないあの勝海舟でさえ必死に学んだそうだから、オランダ語人口は随分多かったのではないだろうか。

それが、福沢諭吉を先頭にして、「これからは英語だ」、というわけで猫も杓子も英語に鞍替えしてしまったのだ。(この目端の利きの良さ、変わり身の早さは慶應義塾の伝統として、脈々として受け継がれている)。西洋の風を運んでくれていたオランダに何の挨拶も無く鞍替えするとは、少し失礼であったのではなかろうか。もっとも、オランダも徳川初期の時代から幕末までの250年の間に、残念ながら英國に七つの海から追い落とされるなど、落ち目になっていたので、機を見るに敏な日本人に見放されても仕方は無かつたのだが。

資源を持たない小さな国が、通商で生きていくためには、世界中と仲良くという基本方針と

武器としての言語は欠かせないのだろう。ひるがえって、日本はどうなのだろう。ものづくりを中核にしてここまで来た。しかし、お隣の中国や米国、そして大欧州連合と比べれば、決して大国ではないことは明らかだ。世界中に良質の製品を届け回るためにには、世界中で良質の製品作りの指導やお手伝いをするためには、世界中と仲良くという方針だけでなく、武器としての言語能力は欠かせない。オランダと違って、英語は日本語とはあまりにもかけ離れた言葉ではあるが、大国ではない民として生きていくためには、この難物を自分のものにするしかないと思うのだが。

(第4回終り)

(2004年5月 篠原泰正)

(

## (5) マンハッタン

—あるいは酒にありつくのもひと仕事—

「マンハッタン」と呼ばれるカクテルがある。ウイスキーベースの、ごくごくスタンダードな飲み物である。僕達が、シリコンバレーで現地のソフト会社と、ある大掛かりなシステムの開発プロジェクトに携わっていたとき、日本の本社からも随分多くの技術者(ハードとソフト両方)が入れ替わり立ち代りやってきた。ソフトウェアの開発リーダーと僕には一つの楽しみがあった。(当時二人ともこの開発のために出張滞在が長く、ほとんどアメリカに居っぱなしの感があった。)その楽しみとは、新しく日本からやってきた技術者を、歓迎会と称してそこそこのレストランに招待するところから始まる。ご承知のようにあちらでは席につくと、先ず、食前酒は何かいかがですかとなる。そこで僕達は、新入りに、せっかくアメリカに来たのだから、カクテルぐらい飲もうとその気にさせ、それなら有名な「マンハッタン」を試して見ればと薦めるわけだ。注文は各人言うこととして、待つ間もなくウェイターがくる。僕らはそれぞれありきたりの飲み物をいい、最後に新入りさんの番になる。「マンハッタン」……(?)、「マンハッタン、プリーズ！」……(?)……デッドエンド。何回繰り返そうが、言い方をどう変えても、まずこの注文は通じない。

もちろん僕らが言っても、まず一回では無理。マンハッタンとはもちろんあのニューヨークの島の名前だから、日本人にも極めておなじみの名前である。マンハッタン、綴りは Manhattan。カタカナのまま発音しては100%通じない。僕がどうやら見つけ出した発音は、間の「h」は抜かして、マナタという。アクセントはナに置く。

バーボンというアメリカのウイスキーがある。今では多くの銘柄が輸入されているから、誰にでもおなじみの酒であろう。この発音もまた至難の業で、まず通じない。バーボン、綴りは Bourbon。バーボン酒のふるさとケンタッキー州バーボン郡(County)の名前からこのように呼ばれている。フランス語でブルボン(フランス革命で断頭台の露と消えたマリー・アントワネットが嫁いだあの王家の名)。多分独立革命以前に、フランスからの移民がこのあたりに植民していたから地名になったのだろうと僕は推測している。カタカナ読みのまま注文しても、まずこの酒にはありつけないことになる。

それではどうすればよいのか。

答えは割合簡単で、一つは、単語だけいっても駄目ということ。例えば、マンハッタンの場合は、「私はカクテルが飲みたい。あのニューヨークの名前がついたのは何だっけ？」と聞けばまず100%ウェイターが「Manhattan」と言ってくれるから、「おおそれよそれ」、でめでたし

めでたし。バーボンの場合は、アメリカでは酒は銘柄、すなわち固有名詞で注文するのが普通なので、「ワイルドターキー」とか「ジャックダニエル」と叫べばよい。このあたりの名前はカタカナなどおりに言ってもまず大丈夫。ビールがのみたければ「ビール」と言わずに「キリン」とか「サッポロ」と叫べばよいわけだ。つまりバーボンの場合は、元々フランス語の英語読みだから発音が難しいだけでなく、ウェイターやバーテンさんが、客が普通名詞で注文してくるとは思っていないところに元々のすれ違いが生じる。多分、そのとき彼等の頭の中では、なにやら「バーボン」と聞こえたそんな銘柄の飲み物があったかなと、忙しく自分のデータベースを検索しているのではないか。

更に言えば、ここでも「ワイルドターキー」と単語だけを言わずに、自分は何をしたいのか、センテンスで述べれば、まず通じる。最も簡単なのは「I have WildTurkey」。私が持つ、ということは、所有するということで、そこから所有したいという意思が伝えられることになるわけだ。バーのカウンターに座って、「I have」ときりだせば、相手は注文してくるなど理解して次を待ち構えているわけだから、その後の銘柄名称の発音が日本式であっても何とか分かってくれるということになる。英語文化の世界は、何しろ「俺が俺が」の主張の世界であるから、自分が何をしたいのか述べることが相手に理解してもらう一番の早道である。

カタカナや発音の話は、前にも書いたが、ここで僕の言いたいことは、単語それ自体の発音はあまり、あるいはほとんど問題ではなく、肝心なのは、センテンスで述べることとなる。センテンスはもちろん短くてもかまわない。センテンスで述べさえすれば、発音がカタカナ式、つまり日本式発音であっても、相手には通じる。なぜならば、センテンスによって、そこには、バーテンさんと客の間で一つの場面が作られていくわけだから、次にでてくる単語や話の予測がつき、多少のことなら類推が働くことになる。人間の頭脳はすごいから、場面から類推がつけば、データベースの中から類似の、なにやらそれらしい発音の名詞を瞬時に探し出してくれることになる。

今から思えば、新入りさんに悪いことをした。発音に恐怖感を覚えさせて、その後の英語の成長に水をさしたのではないかと反省する。上に述べたようなことを、きちんと説明してやれば良かったのだが、当時の僕にはまだそこまで英語のことはよく分かっていなかったのだ。ゴメンナサイ。まったく、当時はこのマンハッタンのような笑い話に溢れていて、(ビール)のハイネケンを注文したら、「オオイエス、マイタイ」と、女性に好まれる甘口のトロピカル風ドリンクが出てきた。「何で俺がマイタイなんぞ飲まなきやならない」と怒ったら、それがまた通じなかつた、といった類の話に事欠かなかつた。まさに、酒一つにありつくのもひと仕事、であった。

(第5回終り)

(2004年5月 篠原泰正)

## (6) ミニスカート

### —あるいは豪州最短—

大英帝国を発祥の地とするミニスカートが大流行、あるいは定着を始めた 1960 年代後半の頃の話である。欧洲の学生の間では、どこの国の女の子のスカートが一番短いかと、口角泡を飛ばしての論議が盛んであった頃の話である。確か、イギリスの雑誌に、次のような小話が載っていた。なぜオーストラリアの女性のミニスカートが、世界で一番短いのだろう。それは、ロンドンからオーストラリアに送った型紙が、途中の旅があまり長いものだから、擦り切れてしまって、シドニーに着いたときには元のサイズよりひどく短くなってしまっていたのだ、と言う他愛の無いお話。この話の裏には、活発なオーストラリア女性の目を見張るような短いスカート丈という事実と、世界の果てのオーストラリアに対する本国人の、田舎者をからかう姿勢があると思える。

オーストラリアの英語がいさか変わっていることは、それに接した人は良く知っているところだが、これはスカート丈のように本国からの途中で擦り切れたために変形したのではなく、聞くところによると、ロンドンの下町の言葉なのだろう。日本で言えば威勢の良い江戸っ子の江戸弁、大阪で言えばドスの利いた河内弁といったところだろう。

僕自身はオーストラリア英語に詳しくはないので論評はできないが、ロンドンでは悩まされた。キオスクのおばちゃんから、当時使っていたライター(安物ジッポ)の石を買おうとして大汗かいた覚えがある。これは、もっとも、おばちゃんのロンドン下町言葉(Cockney)のせいではなく、「ライターの石(stone)ありますか?」と尋ねた僕の方に基本的な問題があった。現物のライターを示したり、タバコに火をつける仕草をしたりの奮闘の結果、おばちゃんの「おお、フリント(flint)」の一言で解決がついた。後で辞書を引くと「flint」は火打石、転じてライターの石、と明確に書いてあるから、「stone of the lighter」をくれと言われておばちゃんが眼を白黒したものもっともだ。お値段は「アイトペンス」であった。すなわち「eight pence 8ペンス」。エイトをアイトと発音するのは典型的な Cockney 発音の一つということで、従って、オーストラリアでもアイトとなる。このロンドン下町言葉がどのようなものか、手軽に接するには、あのサッカーの貴公子「ベッカム様」のしゃべりを聞けば良い。ベッキンガム宮殿のプリンスは、下町のベランメー口調でインタビューに答えてくれている。

オーストラリアで思い出したが、かの地の鱈はクロコダイル(crocodile)というようだ。「クロコダイルダンディー」という大当たりした映画もあったから間違いないだろう。辞書によれば、オーストラリアだけでなくナイル川にいるのもクロコダイルだから、これがワニの一般名称なのだろう。

う。一方、何事もナンバーワンでなければ気がすまないアメリカでは、フロリダに生息するワニはアリゲーター(alligator)と呼ぶ。あるアメリカ人が、日本とのビジネスを始めて、「Thank you」は日本語で「aligato」というと覚えた。忘れないように発音が似ている「alligator」と覚えることにした。さて、次回日本に来たとき、さっそく、彼はサンキューの代わりに使った。「crocodile, crocodile」。多分、彼が何を言っているのか分かった日本人はその時にはいなかつただろう。

話がまたまた逸れてしまった。

僕がここで言いたいことは、オーストラリアとビジネスするときに困らないように、ロンドンの下町で買い物するときに困らないように、イギリスの女王陛下に謁見を賜るときに困らないようするために、学校で英語を習っているわけではないということだ。文化に深く根差した英語(文化英語)の学習は、英文学者とか文化人類学者は必要だろうけれど、僕らには必要ないということなのだ。これはまったく単純明快な話で、一点の疑問点もないはずなのだが、いまだに学校教育で明確に方針化されていないようなのはどうしたわけだろう。ただでさえヤヤコシイ英語を、更に輪をかけて、深く文化に関連したことごとで生徒・学生を悩ますことは、確実に英語嫌いの生徒・学生を増やすことになる。それとも、教育方針として、あの手この手で英語を嫌いにさせる、という項目でもあるのだろうか。もしそうなら、「日本におけるサディズムと英語教育」とでも題した研究論文を書かなければならない。

あるいは、英語の時間や世に氾濫している英語の参考書は、教師の知識をひけらかす場なのだろうか。自分の知識として知っている瑣末の事項を、あるいは例外的事項をほじくりだして、英語をものにするのは大変だと、生徒・学生に恐怖感を植え付けて、優越感に浸っている先生も多いのではないだろうか。

ミニスカートの丈、膝上何センチが、当時は、各国によって標準値が異なっていたように、英語を母語とする国も地域も、そして社会の階級によってそれぞれ自分達のスタンダードがあるわけだから、外国語として英語を学ぶ場合には、それらの文化を超越した、中立的英語を学習対象にするしかない。旧植民地の国民で、旧宗主国で良い職に就きたいと願って勉強するなら、その場合には確かにその旧宗主国の上流階級の英語をマスターすることは大きな利点となり、それだけの努力の価値はあるだろう。僕達は幸いなことに、敗戦後の5年間を除けば、歴史上ずっと独立国だったのだから、アメリカの英語に偏ることもイギリスの英語に偏ることも、あるいはベッカム様の英語に偏ることも必要ではない。

(第6回終り)

(2004年5月 篠原泰正)

## (7) 関係代名詞

### —あるいは漢文の返り(レ)点読み—

既に述べた(第5回マンハッタン)ところだが、1980年代初期、僕達はシリコンバレーで先進的なシステムの開発を、現地の会社に基幹のシステムソフトの開発を委託しながら共同開発風に進めていた。そこでは当然、システムの設計仕様書が英語で記述されて出来上がって来る。委託元のわれわれは、それをチェックし必要な修正事項などを討議し決めていかなければならぬ。僕が読んでも、システムの中身は分からぬので、もちろんソフトウェア技術者に読んでもらわなければならぬ。これがそう簡単な話ではないのだ。「コボル」だの「C」だの、プログラム言語に長けてはいても、人間の言語には弱いのが平均的なソフト技術者の姿であったから、設計仕様書のチェックは、同時に英語の勉強の時間を兼ねることになる。

「ヤマチャン、駄目だよ、「which」以下からひっくり返して前に持ってきては、先頭から書いてある順番で読んでいかなきや」。先生を務めるのもなかなか大変である。何しろ、日本のどの中学、高校を出ていようと、一様に、関係代名詞以下からひっくり返して、すなわち日本語の順序に並べ替えて読む癖、というか指導を受けてきているので、そのやり方をご破算にするのはなかなかの難事業なのだ。

何でこんなことになってしまっているのだろうと考えて、ハタッと気がついた。高等学校の漢文の時間に読まされた「返り点(レ)」付きテキストだ。中国文の順序のとおりに読まないで、日本語の順序に並び替えて、すなわち返り点のところで前後をヒックリ返して読むあれだ。その時には、何の疑問も覚えずに素直にそのように「漢文」を読んでいたのだが、あれは何の教科時間だったのか。「中国語」の時間でなかつたことは、はつきりしている。後から思い返せば、中国語で書かれた詩や散文を、日本語風に読むという不思議な時間であった。お蔭で、幕末、湯島にあった昌平講の先生を彷彿させるような老学者に教わりながら、中国語とは何千里も隔たつたままで終ってしまった。

僕達が、中学、高校で毎週何時間も過ごしてきた英語の時間は、あれは「英語」の時間ではなく、返り点つきの「英文」の時間だったのだ。中国語文章も英語文章も、まったく同じように日本語の順序に直して生徒に理解させるというやり方は、一面から見れば筋の通った方法である。そこには、外国語を身に付けさすという方針は、まったくないのだ。「漢文」の時間も「英文」の時間も、言ってみればすべてこれは「国語」の時間であった。

このような教育を何十年と続ければ、日本人のほとんどが、日本語という眼鏡を通しての

み外国を眺めるようになつても何の不思議でもない。前に、ブッシュさんの悪口を書いたが、日本人も彼に負けず劣らずの、自分の村の流儀で世界を理解する(したつりになる)「田舎っぺ」なのだ。もっとも、ブッシュさんはアメリカの外は悪(彼の好きな言葉では「evil」)に満ちた世界と眺めるが、日本人は外の世界も自分達と同じように善意に満ちていると眺める違いはある。両者共に大いなる間違いではあるが、

「which」以下からヒックリ返して日本語の順序にして「英文」を読ませるという方針は、国策なのだろうか。日本人を外国かぶれにさせないための、国粹愛國主義者に育てるための方策なのだろうか。それとも、何でも醤油味をつけて、日本というお袋の味にしないと心が落ち着かないのだろうか。

(「漢文」の時間は、もったいないことであった。発音は日本式のままでいいから、せめて中国語の記述のまま読むように教えてもらつていれば、中国語というものに少しほは理解できたであろうに。その記述の順序が違うことで、そこに「なぜ?」という疑問あるいは好奇心も生まれたであろうに。漢字の理解と利用という面で、自分の日本語の力には役立つたと思うが、僕の中には「中国語」はゼロのままである。

そして、もっと悲劇的なのは、多くの人が、あの大学入試の英語試験の難関を越えてきた人も、「英文」を返り点を入れて日本語として読む力だけ養ってきたことだ。日本において、英語教育ほど投資に対しての効果が少ないプロジェクトは類を見ないのでない。学校教育を先頭にして民間の英語産業まで含めると、一体何兆円のお金が毎年投資されていることだろう。そして一人一人が勉強している時間を合計すれば(教室で嫌々座っている時間も入れて)、一体どれほどの時間が無駄に費やされていることか。儲かれば成果が出ようがしまいが関係ないという民間の教育産業は別として、公共プロジェクトとして、投資対効果(ROI: Return of Investment)を問われたことはないのだろうか。

なぜ効果がでないのか、効果どころか、学校英語のために英語嫌いになる生徒が大勢出るというマイナス結果を生んでいる現状を分析もせず、つまり、まともな対策も考えずに、今度は「会話重視」だという。日本の若者を全員、米軍相手の「ポン引き」にでも仕立てるつもりか?(チョット例えが古いか)

冒頭の話から、20年以上の時間が経っているが、状況は改善されていないのではなかろうか。優秀なIT技術者が、相変わらず英語の設計仕様書を読むのに、「which」からひっくり返して四苦八苦しているのではないか。

(第7回終り) (2004年5月 篠原泰正)

## (8) 国際派アメリカ人

### —あるいは珍しい存在—

いつだったか、会社の四半期ごとの経営会議が、工場のある蘇州で行われたことがある。その打ち上げの会食がホテルの中華レストランであった。4~5人づつのテーブルに分かれて賑やかに食事が始まった。僕の隣は、OEM事業部長で、この男はチェコ人で、1968年、「プラハの春」の名称で有名なソビエトロシアへの叛乱の際、学生の中でも主だった存在だったらしく、運動が鎮圧された後、命からがらアメリカに亡命をせざるをえなかったという派手な経歴を持っている。テーブルの斜め前には、割合最近会社に入ってきた人事本部長で、40歳代のアメリカ人女性である。出身は米国本社のあるカリフォルニアではなく、東海岸である。

この女性が、一つの典型的なアメリカ人で、中華の料理が出てくるたびに、この料理は何だ、何でできているのかと、僕達に聞いてくるのだ。料理については日本語でもほとんど説明できないような僕としては、英語で中華料理を説明するなどという離れ業ができるわけがない、「ご説明」はもっぱら隣の亡命チェコ野郎が引き受けてくれた。回答に納得して、危険な料理ではなさそうだと思ったときは、おそるおそる箸をつけ、チョコッと口にする。彼がふざけて、それはカエルの肉だ、と嘘を言ったときは、ほとんど顔色も変わらぬぐらいであった。

チェコ野郎もさすがに対応に疲れたのか、僕の肘を突っつき、小声で言う。「ゴチャゴチャ言わずに、食ってみればいいじゃネーか。死にやしないよ。アメリカ人はこれだから参っちゃうよね」と僕の同意を求める。まったく彼の意見に賛成である。僕がそれまで観察してきたところから判断しても、彼らアメリカ人は、もちろん一般的に言って、こと食べ物に関しては恐ろしくなるほど保守的である。いや、食べ物だけでなく、生活様式全般において、新規要素の取り入れには臆病である。それでもこの20年(ここでの場面からだから、今から30年近く前から)ぐらいで随分冒険心を出すようになって来たようで、昔は、海苔巻き寿司にチャレンジできる人は、10人に一人ぐらいであった。もともと海草を食べるということが彼らには驚天動地のことであるのに、それに輪をかけて海苔は真っ黒でなにやらカーボン紙のように見えて気持ち悪いとの事であった。\*そのため、渡米した寿司職人のなかで「新規開発」が好きな誰かが、のりを中に巻き込み表はご飯にするという、逆転海苔巻きを編み出した。これが今やどこの寿司店(在米の)のメニューにもあるベストセラー「カリフォルニア巻き Californian Roll」である。

この人事本運部長は残念ながら典型的な国内派アメリカ人であったが、それでは国際派ア

メリカ人という種族はいるのだろうか。僕の経験では、数少ないが居る。国際派の特徴は、外国人に対して、あるいは外国人が混じっている会議においては、自分の母語としての英語は控えて、できるだけわかりやすい表現で、速度もゆっくりしゃべってくれるところにある。更に言えば、外国の料理にも恐れを示さない。例えば赤みの刺身も食べる。もっとも、シャコまで食べられる人にはあったことがないが。この国際派の人はまた、外国語を勉強した経験があるという特徴もある。変な話に聞こえるかもしれないが、アメリカ人およびイギリス人には、外国語を学んだことのない人が驚くほど多い。英語一本で世界中通じるという便利さが、教養という面では田舎人になっているというマイナスを生じている。

国際派アメリカ人が少ないとする事実は、シリコンバレー在住企業のCEOの多くが外国籍、主流はヨーロッパ人であるということにも現れている。これは統計を見たわけではないので、信頼性には乏しいが、僕が勤めていた会社のCEO（本人はイスラエル人）との話題になった時、彼も確かに、CEOの半分ぐらいはアメリカ人ではないという印象を持っている。なぜだろうか、と話題が進んで、二人で一致した結論は、この地のように多種民族社員を抱えた企業の経営には、民族の多様性に昔から慣れているヨーロッパ人でないと難しいのだろう、であった。言語の流暢さ以上に、色々な民族の人の考え方慣れて、気配りができる方が、経営管理には重要であるといえる。

それでも、アメリカ人の国際度は、今から30年近く前と比べると随分進んだ。単に寿司が食べられるようになったというだけでなく、先に述べたように、外国人と話をするときに気配りができる人が増えたことからも言える。昔は、ビジネスの話なのに、日本人の僕に対して、南部英語でまくし立てる人もいた。自慢じゃないが、彼の話の90%は理解できなかった。彼は自分の英語が分からぬ人がいるという事実には気がついていなかつたのだろう。あるいは、気がついたとしても、今度はどのような英語で話していくか、そのノウハウは持ち合わせていなかつたのだろう。

更に、もっと大きな問題は、言語の表現だけでなく、違う発想、違う論理の組み立てに出会った時に、それを理解できる頭脳構造と理解しようという意思がある本当の国際派アメリカ人が少ないとすることだ。僕の経験の範囲で述べているので、ここで言うアメリカ人というのは、西ヨーロッパ移民の起源を持ち何代もアメリカ人である人々のことなのだが、彼らにこちらの主張を理解してもらうのは難事業である。これは英語に不自由はしないヨーロッパ人も口にする感想であり、僕の英語力のせいだけではないのだ。

なぜこのようなことが生じているのか、「アメリカ人は偉大な田舎ッペ」だからといいう一言だけでは説明がつかない、もっと深い分析が必要に思えるテーマではある。ビジネスの場面でアメ

リカ人と正面から渡り合った人なら、多かれ少なかれ、僕や上記のヨーロッパの人と同じような感想を持ったことであろう。僕には直接の経験はないから確かなことは言えないが、一つのビジネス上の契約などをアメリカ人と取り決めするのは大変な作業であろうと推測できる。彼等の主張の強さに辟易するという以上に、こちらの論理なり事情なりを理解してもらえないもどかしさ。そして、疲れ果てて押し切られてしまうという結末。

自分達とは違う思考様式や信条を持つ人々（単純に言えば他民族）が世の中には居るということを、相手の考え方と事情を察して妥協できるところはする、という姿勢を身につけていかないと、アメリカ人は世界の中での住み心地を自ら悪くし、周りの人も疲れ果ててしまうという不幸はこれからも続くだろう。

隣席の同僚、チェコ野郎がつぶやいたように、中国に来て中華料理を前にしているのだから、これは何だ何だと聞かないで、まず食ってみて欲しいものだ。それが相手を理解する第一歩なのだから。

（第8回終り）

（2005年6月 篠原泰正）

## (9) オフリミット

### —あるいは立ち入り禁止—

ヒコーキ少年であった僕は、中学生の時に何度も米軍厚木基地に通ったものだ。新宿から小田急に乗り大和駅下車。今とは違って一面畠の中の道をテクテク歩いて厚木基地の滑走路の北端にたどり着く。夏はたいてい南風だから、風に向かって着陸してくるヒコーキが間近に眺められるという寸法だ。畠と基地の間は背の高い金網で仕切られており、札がかかっている。「Off Limits」と、英語を習っている中学生だから、これが「立ち入り禁止」であることぐらいは分かる。というより、当時、都内でも郊外でもあちこちに米軍の接收地があったので、例えば学校の近くには山王ハイツ(赤坂溜池)のように、その金網に掛けられているこの看板と併記されている「立ち入り禁止」は見慣れたものであった。

しかし、立ち入り禁止という意味内容であることはわかるが、実は「off」の意味が分からなかつた。「limit」は「限界・境界」だから、境界がオフ、つまり解放されているのだから、入っていいのではないか、禁止とは何か変だとの思いがあった。この疑問は長いままで放置されて、ようやく自分なりに納得したのは、このときから実に30年から40年後であった。それにしても、意味が分からぬまま随分長い間放つたらかしにしていたものだ。

自分なりに理解したところでは、この「off」は、もちろん「limit」から向こう側を解放しているのではなく、「limit」からこちら側は「off」ですよ、と言っているのだ。つまり金網の内側は米軍の法の下にある地域だけれど、外の畠の中で何をしようとそれは日本の法の下にあなたの勝手ですよ、ということなのだ。事実、一度だけ金網の内側を軍用犬を連れて巡回する守衛さん(日本人)にとがめられたことはあるが、半日、好きなヒコーキを畠の中で眺めながら過ごせたわけだ。こちらから向こう側に立ち入ることは禁止されています、という意味ではなく、金網という limit の外は自由であると宣言されることになる。

同様に、ずっと意味が分からなかつた言葉に、日本語にもなっている「オフレコ」がある。もちろん「off record」のことでのことで、例えば政治家などが新聞記者に、今からしゃべることはオフレコだよ、と使われることは誰でも知っている。記録(record)したことを記事にしないでくれ、その条件でなら話してもいいという取り決めである。適当な日本語がなかつたためか、立ち入り禁止とは違って、こちらは英語のまま日本語になった。(もちろんオフレコードなどと長つたらしく言う人はいないのでオフレコとなった)。意味はわかるのだが、これも同じようにレコードしたことをオフにするのだから、意味は反対のような気がしてならないまま、これも放つたらかし。上と同じように考えてみると、この言葉の意味は、レコードした内容の外側はあなたの勝手で

すよ、ということになる。つまり、しゃべるということは当然あなたの耳を通して頭の中にレコードされるであろう。そのことはOK。しかしそのレコードした内容は手をつけず、それ以外のこととはオフ、どうぞご自由にということになる。

欧米文化では、二者間の契約型だから、例えば横断歩道という存在を考えて見ると、横断歩道はこちらという案内はあっても、横断歩道以外の道路横断は「禁止」とはどこにも示されていない。横断歩道という設備は市で用意したのだから、それ以外のところで道路を渡って、車にはねられてもそれはあなたの勝手と言うわけだ。一方、日本は指導、命令型であるから、道路は横断歩道を渡りましょう。それ以外は禁止です、という指導がいまだに都会のど真ん中でなされているし、横断歩道以外を渡っているところを見つかればお巡りさんからしかられるだろう。

「オフリミット」は、入ってはいけないと命じているのではなく、境の外はあなたの勝手、内側は自分達の勝手という二者間、厚木基地では僕と米軍の間での契約なのだ。「オフレコ」はレコードの外はあなたの勝手、しかしレコードの中身は(著作権?)自分のものだから、それを勝手にばらしたら契約違反だよ、という政治家と記者二者間の契約なのだ。レコードをばらしてはいけないという命令、あるいはお願ひではない。

英語は、私とあなた、あるいは私と自然物、神、概念、法人、国家等々のオブジェクト(object)との関係図式で成り立っているとみることができる。上の二つの言葉もそのように理解した。同じように、僕には理解と利用が難しい「come」を見てみよう。中学一年の一学期に出てくる、というより最近では幼稚園児でも知っている、基本単語中の基本単語であるが、基本語であるだけに奥行きが深くて難しい。一番の障害は、僕らは「go」は行く、「come」は「来る」と中学で習ったとおりに覚えこんでいるところにある。

家に訪ねてきた人がいる。どうぞお入りください「come in」。誰でも知っているし使えるだろう。しかし、僕達は、「私の居る場所(家の中)へ、(あなたはどうぞ)来てください、来てもいいですよ」とお願ひ、命令、あるいは許可の意味で使っている。ところが、どうやら英語では、「私の居る地点にあなたは進む(向かう)ことができる。(進かどうかはあなたの勝手ですけれど)」という意味で使われているらしいのだ。「come」とは、ある定められた目標地点に向かう(行く)時に使う。奥さんに、「スーパーに俺も一緒に行くよ」というときは、「I will come with you to the super-market.」という。スーパーという定められた目標地へ向かうのだから「go」ではなく「come」が使われる。そうでないと、歌のフレーズにも出てくる「come with me」の意味はわからなくなる。「僕と一緒に来よう」では意味を成さない。「僕と一緒に二人の目的地(どこかは分からぬが)へ行こうよ」という意味だろう。

「come」を研究社の英和大辞典で引くと、真っ先に「Come here」という用例が挙げられ、「ここに来なさい」という訳語が列記されている。その訳語のとおりに、僕らの頭の中では、自分から少し離れたところに居る誰かに対して、今居る地点から自分の地点(ここ)に来るよう指導、要請、命令している、と理解する。果たしてそうだろうか。既に「come in」でみたように、英語を母語とする人の頭の中では、例えばお母さんが息子に向かって言う時には、僕らの理解しているような二者間の関係ではなく、「あなたは私の居る地点(ここ)に向かって進む事ができる。向かうかどうかはあなたの自主の下に勝手である。しかし向かわなければ契約違反で、お仕置きが待ってるよ。」という意味なのではなかろうか。ここから「できる:can とか may」が結果として命令の意味で使うことができるという用法につながっているのではないか。

( 話がいさか難しくなってきたが、僕の言いたいことは、まず、英語を母語としている人が理解している人間関係(つまりそれで社会が成り立っている)と僕ら日本語を母語としている者が理解している人間関係とは随分違うということだ。もちろん、人間関係にとどまらず、人間と自然等の客体に対する関係式も大きく異なる。

だから、「Off limits」は「立ち入り禁止」、「Come in」は「お入りください」、「Come here」は「ここに来なさい」と日本語で理解していると、日本人の理解する関係式で理解することになり、英語で表現されている元々の関係式は理解していない危険性が大きいにある。丸暗記しておけば、確かに、自分の家にイギリスやアメリカの人人が来たときに「Come in」といえば問題なく通じる。大いに役に立つ。しかし、恐ろしいことは、自分が考えている僕と客との日本式の関係と、客人がこの言葉で受け止めている英語式の僕との関係は、どうやら違っているらしい、という事なのだ。

大元の文化を同じくしているヨーロッパの中では、例えば英語とフランス語の間であっても、このような関係式のズレまでは生じないであろう。つまり、一つの言葉で互いに異なる関係をイメージ(理解)しているという惧れはないだろう。一方、日本語とヨーロッパ言語の間には文化に根差す根本的な違いがあるから、ここまで述べてきたような問題が存在する。

あまり難しい話をして英語に恐怖感をもたれても困る。僕の言えることは、このような課題があると認識した上で英語を使いこなそうということにつきる。知らないで、英米人も僕らと同じように考えているのだろうと勝手に思い込んで使うのと、彼らは僕達と違う図式を持っているぞと理解した上で使うのでは、英語で情報を得る、その内容を分析する、あるいは英語で書く、話す時の使いこなしに大きな差が出てくることになるだろう。

(第9回終り))

(2004年6月 篠原泰正)

(

(